

1258年のブリアン・オニールとオコナー、オブライエンとの同盟

田中 美穂

一般科文系

アイルランドの年代記には、1258年に、ティローン王ブリアン・オニールと、後のコナハト王エイド・オコナー、トモンドの王族タイグ・オブライエンが同盟を結び、ブリアン・オニールに「統治権が与えられた」という記述がある。ブリアンは、「アイルランドのアイルランド人(=ゲール人)の王(=上王)」とも記されるが、13世紀のアイルランドでこの称号を持つ王は、ブリアンだけである。

本稿では、まずブリアン・オニール、エイド・オコナー、タイグ・オブライエン各自の人物像を探り、1258年のこの同盟が史料ごとにどのように述べられているのかについても言及したい。その上で、この同盟が歴史的にどのように位置づけられているのかについて考察する。

キーワード：13世紀アイルランド史、アイルランドの上王、ブリアン・オニール

はじめに

12世紀後半から13世紀前半にかけて、イングランド勢力が、アイルランドを、侵入、占領、支配していった。イングランド側にとって侵入しやすい土地や利用価値が高い土地から占領されていった。ブリテン島に近く、肥沃な土地であるアイルランド南東部のレンスターやアイルランド中心部のミーズは、その典型的な地域であった。イングランドの支配地域は、やがてアイルランド西部のコナハトやマンスターの大部分にも拡大していった。

一方、アイルランド北東部のアルスター地方は、ノース海峡に面する一部の地域のみがイングランド勢力、つまり、ジョン・ド・カーシーや歴代アルスター伯の直接の支配領域となった¹⁾。その他の大半の地域は、アルスター伯に忠誠は誓ったものの、実質的には現地のアイルランドの王たちが支配をしていた。

本稿では、まずブリアン・オニールの生涯をたどる。続いて、1258年の集会で、ブリアンと同盟し、ブリアンの「アイルランド王位」を認めた後のコナハト王エイド・オコナー(1274年没)、マンスターのトモンドの王族タイグ・オブライエン(1259年没)についても見ていきたい。さらに、1258年と1260年の年代記史料の記述について検討する。アイルランドの複数の年代記で「アイルランドのアイルランド人(=ゲール人)の王」などと記されたティローン王ブリアン・オニールを中心に取り上げる。最後に、1258年のこの同盟の意義について考察をする²⁾。

1. ブリアン・オニールの生涯

ここでは、ブリアン・オニールの生涯についてたどっていき³⁾。生まれた年は不明であり、1238年までの状況はよく分かっていない。この年に、アルスター伯ヒュー・ド・レイシー(1242年没)からティローン王として認められた。ティローンという王国は、おおよそ今日のティローン州、アーマー州、デリー州に相当する。このアルスター地方の大部分を、ブリアン・オニールは王として、1241年から実質支配していたと見られている。1241年に、ライバル関係にあったマクロフリン家を倒し、そのマクロフリン家の娘とブリアンは結婚した。一方、現在のドニゴール地方を支配したティアコネル王マイルシェフラン・オドネル(1247年没)は、ブリアン・オニールの味方であり、ともにマクロフリン家を攻撃した。

1249年、ブリアンは、コナハト王フェドリミド・オコナー(1265年没)をかくまった。この人物は、エイド・オコナーの父親である。フェドリミドは、モーリス・フィッツジェラルド(1257年没。1232~45年にアイルランド総督)により、コナハトから追放されていた。翌年の1250年まで、フェドリミドはブリアンのもとにいた。ブリアン・オニールとオコナーとの同盟関係は、ここに始まったようである。

この頃、ブリアンは、ブレーフネ王カハル・オライリー(1256年没)らの攻撃を受けた。ブレーフネは、アルスターとコナハトの境界にあった王国で、現在のリートリム州とキャヴァン州の辺りに位置した。1252年までにブリアンは力を回復し、イングランド人との戦争を始めた。そして、モーリス・フィッツジェラルドの次に1245~55年にアイルランド総督となったジョン・フィッツジェフリー(1258

年没)がティローンに進軍し、ブリアンの服従と、ブリアンの兄弟を人質として渡すことを迫った。さらに、ティアコネル王ゴフリー・オドネル(1258年没)もティローンに侵攻し、ブリアンに対して勝利した。ゴフリーは、ブリアンの生涯にわたってのライバルともいえる人物で、ゴフリーの兄弟である前記のマイルシェフランは、ブリアンの味方であったが、マイルシェフランの死後にティアコネルの王位を継いだゴフリーとは、幾度も戦うことになる。

1253年には、ブリアンは、モーリス・フィッツジェラルドの遠征軍を撃退した。また、東アルスターで、イングランド人への復讐を果たす。イングランド人勢力が築いたダンドークなどの町や城を徹底的に破壊した。この時から、ブリアンはアルスター伯への貢納の支払を免除されることになった。

1255年からは、同盟を結ぶオコナーとより親密になり、オコナーの宿敵であるオライリーを3回にわたってともに攻撃するが、すべて失敗に終わっている。オライリーは、ブリアン・オニールにとってもライバル関係にあり、共通の敵の存在もあって、オコナーとの同盟関係が強まったものと考えられる。

1257年、ゴフリー・オドネルは、モーリス・フィッツジェラルドとの戦いで致命傷を負った。フィッツジェラルドもこの戦いで受けた傷のために死去した。翌年、ブリアン・オニールは、ティアコネルに侵攻し、ゴフリーに服従を要求した。しかし、ゴフリーは、弟のドヴナル・オドネル(1281年没)に後継者として王国を託して息を引き取ったという。

ブリアンはこの年の1258年後半に、オコナー、オブライエンと改めて同盟し、「アイルランドの上王」、すなわち「アイルランド人の王たちの王」として認められる。

1259年には、スコットランド人領主の娘を新たに妻とした。また、ドヴナル・オドネルに兄のゴフリー同様に服従を要求したが、ドヴナルは、ブリアンのいとこの子に当たるエイド・ブデ・オニール(1283年没。ブリアンの死後に次のティローン王となる)と手を結び、ブリアンに攻撃を仕掛けた。1258年の同盟者のタイグ・オブライエンは1259年に死去したが、ブリアンはもう一人の同盟者のエイド・オコナーと行動をともにした。

1260年5月、アルスターでのイングランド人との戦いに加わるようにエイドに要請し、エイドはコナハトから大軍を率いてやって来た。このダウンの戦いが、ブリアンにとって最後の戦いとなった。ブリアンの親族のエイド・ブデ・オニールはイングランド人の側につき、ブリアンは戦死した。一方、エイド・オコナーは逃亡に成功した。

ブリアン・オニールは斬首され、その首は、イングランド王ヘンリー3世(在位1216～72年)のもとに運ばれた。

2. エイド・オコナーとタイグ・オブライエン

次に、ブリアン・オニールの同盟者であるエイド・オコナーについて見ていきたい⁴⁾。「エイド」に対して「ヒュー」という英語名が用いられることもある。このエイドの父のコナハト王フェドリミドは、上述のように、コナハトから追放されていた1249年にブリアンのもとにいた。この時、息子のエイドは、西レンスターでイングランド人と戦っていた。もともとオコナー家とオニール家は、アイルランドにおける入植者、すなわちイングランド勢力とずっと戦ってきた歴史があった。

エイドは、1259年、ヘブリディーズ諸島の有力な一族マク・ドヴナル(=マクドナルド)家の娘との結婚により、嫁資として、160人のギャロウグラス(スコットランド出身のゲール系兵士)を手に入れた。エイドは「エイド・ナ・ガル(=異国人のエイド)」と表記されることがあるが、ギャロウグラスの獲得に由来すると考えられている⁵⁾。

1260年5月のダウンの戦いで、ブリアン・オニールとともに戦ったが敗北し、生き残ったエイドはコナハトに帰還した。その後、1265年の父の死にともない、エイドがコナハト王となった。

オコナー家の人々は、マンスターのトモンド王の娘を母親に持つリチャード・ド・バーク(1243年没)の頃から、すなわち1220年代から、コナハトの覇権をめぐる、ド・バーク家と戦ってきた。ド・バーク家にはヘンリー3世という有力な後援者がついていて、1228年に、エイド・オコナーのおじにあたる同名のエイドが殺害されたことによって、アイルランド総督も務めたリチャード・ド・バークが、コナハトの征服者となった⁶⁾。

エイド・オコナーも、リチャードの息子であるアルスター伯ウォルター・ド・バーク(1271年没)とコナハトの覇権をめぐる争ってきたが、1270年にようやくエイドが勝利を収め、ド・バークを退け、エイドがコナハトの支配者となった。

他にも、オドネル家とともに、1265年にはスライゴー中のフィッツジェラルド家の城を取り壊した。また、1266年には西コナハトとスライゴーの多くの入植者の居住地をエイドの軍が焼き払った。

このようにコナハトからイングランド勢力を排除することに成功したエイドであったが、王位を継ぐ息子を残すことなく、1274年に死去した。

タイグ・オブライエンについては、情報が少ない。父親はトモンド王コンホヴァル・オブライエン(1268年没)で、タイグがトモンド王として父の跡を継ぐはずが、父より早世したために王になることはなかったようである。『アルスター年代記』には、その死を伝える1259年の記述に「未来のマンスター王」とある⁷⁾。また、『イニスファレン年代記』では、タイグの死は、「異国人にとって良き知らせ」と記されている⁸⁾。

タイグは、父コンホヴァルとともに、ヘンリー3世によりシャノン川の北に土地を与えられたイングランド人た

ちと戦った。1257年には勝利を収め、翌年、ブリアン・オニールに会うためにカイル・ウィシュケ (Cáel Uisce) を訪れた。そのためか、タイグ・オブライエンは、タイグ・カイル・ウィシュケ・オブライエンとも称される。1258年の同盟を結んだ翌年、理由は不明であるが、タイグは死去した。このことは、ブリアン・オニールとエイド・オコナーにとっても、痛手となったであろう⁹⁾。

3. 1258年の集会とブリアン・オニールの称号

この時代のゲール人の王たちについての記録は、もっぱらアイルランドの年代記史料に残されている。

1258年にブリアン・オニールが、特別な称号を得たことについて、『アルスター年代記』から見ていきたい。エイド・オコナーとタイグ・オブライエンによって、大勢の者がブリアン・オニールに会うためにカイル・ウィシュケに連れて行かれ、そこでブリアン・オニールに‘ardchennus’を与えたとある¹⁰⁾。‘ardchennus’は、アイルランド語で「第一の支配者 (の位)」といった意味になる。

続いて、『ロホ・ゲ年代記』には、やはり、カイル・ウィシュケでエイド・オコナー、タイグ・オブライエンによって大きな集会が開かれ、ブリアン・オニールもそこにいたことが記される。その時、彼らは和睦し、ブリアン・オニールには、アイルランドのゲール人に対する「統治権 (rige)」が与えられたと記されている¹¹⁾。

『コナハト年代記』でも、エイド・オコナーとタイグ・オブライエンがカイル・ウィシュケでブリアン・オニールと大きな集会を開いたとある。そこで彼らは和睦し、ブリアン・オニールにアイルランドのゲール人に対する統治権 (rige) を与えたとある¹²⁾。

『ロホ・ゲ年代記』と『コナハト年代記』は、同じ系統の年代記と考えられており、内容がよく似ている。

『四学者によるアイルランド王国の年代記』(以下、『アイルランド王国の年代記』と略す)は、1630年代に、4人のドニゴールのフランシスコ会所属の学者によって編纂された。内容が各種年代記史料の総まとめのようになっており、古い史料も含まれていることから、中世の歴史研究においても利用されている。この年代記の内容は、他の3点と同じような内容となっている。カイル・ウィシュケでブリアン・オニールに会うために、エイド・オコナーとタイグ・オブライエンにより大きな集会が開かれたこと、首長たちが互いに和平を結んだ後に、一致して、ブリアン・オニールにゲール人に対する統治権が授けられたことを伝えている¹³⁾。

1258年にオニール、オコナー、オブライエンが参加した集会が開かれた場所カイル・ウィシュケは、現在の北アイルランド南西部ファーマナ州のベリーク (Belleek) 近くであったとされる¹⁴⁾。カイル・ウィシュケとは、「狭い水路」といった意味になる。

ブリアン・オニールは、2年後の1260年にダウンの戦いで戦死するが、その出来事も各年代記に記されている。この戦いは、現在のダウン州 (北アイルランド南東部) のダウンパトリックの近くで行われた。『アルスター年代記』では、アイルランド北部の異国人によって、ブリアン・オニールなどゲール人の多くの貴族たちが殺害されたことを伝える。ブリアンについての称号は記されていない。くり返しになるが、この戦いには、エイド・オコナーも参加していた。エイドは戦死することなく、逃れている。

『ロホ・ゲ年代記』でも、上述のようなダウンの戦いについての描写が見られるが、注目したいのは、戦死したブリアンの称号である。「アイルランドのゲール人の王」(ri Gaoidel Erenn) と表記されている。『コナハト年代記』にも、綴りが少し異なるものの、同じ表記が見られる (ri Gaidel Erenn)。1260年の『アイルランド王国の年代記』では、戦死したブリアンに対して、「アイルランドの支配者」(uachtorán Erenn) と記されている¹⁵⁾。

主な先行研究では、1258年の同盟についてどう評価しているのであろうか。S・ダフィーは、オコナー家とオブライエン家が、彼らの祖先の主張を捨てて、ブリアンに対して「アイルランドのアイルランド人の王としての権利」を認めたことに対して、1258年の集会を「異例の集会だった」とし、「75年も上王の位が不在であった後の復活の試みに等しい」と論じる。コナハト王ルアリー・ウア・コンホヴァル (=ローリー・オコナー) の1183年の退位後、「アイルランド人の上王」は不在だったのだ。J・ライドゥンは、この「ブリアン・オニールによる上王位復活の試みなどが最初のゲーリック・リヴァイヴァルの表明となった」と述べる。一方、イングランド王室がアイルランドを放置していたこともその重要な要因と見なす。K・W・ニコルスも、ブリアン・オニールは、「アイルランドのイングランド人支配を打ち倒すために、自ら偉大なゲール連合の長になった」「彼は未来の王になるべく選ばれたが、1260年のダウンの戦いで敗北し、殺害された」と記す¹⁶⁾。

以上、この時代を専門とする主要な研究者たちは、1258年の集会および同盟について、「(他に類のない) 特別なもの」と評価している。ゲーリック・リヴァイヴァルの最初の例と見なす向きもある。

おわりに

ブリアン・オニールに対して年代記史料で与えられた称号やその生涯から判断すると、ブリアンは、あくまでも当時のアイルランドにおいて、「現地のアイルランド人の、すなわちゲール人の中で最高位の王 (上王)」という位置づけであったと言える。オコナー家とオブライエン家の同意を得たことで、1258年当時のゲール人の王の中では、ブリアン以上の権力者はいなかったと考えられる。

ブリアン・オニールに限ったことではないが、当時のア

イルランド勢力もイングランド勢力も、敵と味方の構図が目まぐるしく変化する。同じ民族内はもとより、同じ親族内でさえ戦いが起こっていた。そんな中、各自の思惑が何であれ、いわばアイルランドにおける名門であるオニール、オコナー、オブライエンの3家が同盟関係を結んだことには確かに意義がある。引き続き、13世紀後半のゲール側の動きを見ることで、この同盟の重要性もより明らかになってくるのではないか。今後の課題としたい。

注

- 1) 田中美穂「ルアリー・ウア・コンホヴァルと二人の侵入者たち—中世後期アイルランドの政治的変容に関する一考察—」『メトロポリタン史学』第9号, 2013年, 117-126頁。
- 2) 中世アイルランド史の研究では、13世紀頃からアイルランドの固有名詞に対して、英語化した表記が用いられるようになる。たとえば、本稿で扱うオニール(O'Neill)がこれに相当するが、中世初期の時代では「イー・ネール(Uí Néill)」と表記される。意味は「(伝説的な王)ニール(Niall)の子孫」である。13世紀のアイルランド語の年代記史料を見ると、オニールの「オ」の部分に対して、アイルランド語で、「Ui」や「Ua」といった、「Ó」や「O」に移る前の表記も見られ、流動的である。アイルランド語のカタカナ表記については、本邦で全てが一致しているわけではないし、統一することも難しいだろう。何より、上記のように、時代によって、原語の綴りも発音の仕方も変わってくる。本稿で扱う時代は過渡期である。それゆえ、今後の研究のことも考慮し、「オニール」という表記を用いる。オコナー、オブライエンについても同様である。
- 3) 以下、下記の研究を参照した。Sean Duffy, *Ireland in the Middle Ages* (Dublin: Gill & Macmillan, 1997), pp. 117, 122-123; Robin Frame, *Colonial Ireland 1169-1369* (Dublin: Four Courts Press, 2nd ed., 2012), p. 41; Emmett O'Byrne, 'O' NEILL (Ó Néill), Brian (d. 1260)', in J. McGuire and J. Quinn (eds.), *Dictionary of Irish Biography: from the earliest times to the year 2002 (under the auspices of the Royal Irish Academy)* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009) (以下 *DIB* と略す), vol. 7, pp. 739-741. E. O'Byrne, 'O'DONNELL (Ó Domnaill), Gofraid (d. 1258)' in *DIB*, vol. 7, pp. 377-378.
- 4) 以下、下記の研究を参照した。Duffy, *Ireland in the Middle Ages*, pp. 122-123; E. O'Byrne, *War, Politics and the Irish of Leinster, 1156-1606* (Dublin: Four Courts Press, 2003), p. 55; K. W. Nicholls, *Gaelic and Gaelicized Ireland in the Middle Ages* (Dublin: Four Courts Press, 2nd ed., 2003), p. 168. ; E. O'Byrne, 'O'CONNOR (Ó Conchobair), Fedlimid (d. 1265)' in

DIB, vol. 7, pp. 243-244.

- 5) Duffy, *Ireland in the Middle Ages*, p. 123; Frame, *Colonial Ireland 1169-1369*, p. 52; Beth Hartland, 'The Height of English Power: 1250-1320', in Brendan Smith (ed.), *The Cambridge History of Ireland : volume I, 600 - 1550* (Cambridge: Cambridge University Press, 2018), pp. 227-228; Katharine Simms, 'The Political Recovery of Gaelic Ireland', in *ibid.*, p. 285.
- 6) 田中美穂「レンスターのウィリアム・マーシャル家—13世紀アイルランドにおけるイングランド人領主や現地地の王たちの闘争—」『メトロポリタン史学』第15号, 2019年, 158-160頁。
- 7) *Annals of Ulster*, W. M. Hennessy and B. MacCarthy (ed.), 4 vols. (Dublin, 1887-1901), 1259.7. 以下, *AU* と略す。なお、本校で複数取り上げる年代記史料は、現在ではネットで全て公開されている (CELTe: The Online Resource for Irish history, literature and politics. <https://celt.ucc.ie/index.html>).
- 8) *The Annals of Inisfallen*, S. Mac Airt (ed.) (Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 1951), 1260.6.
- 9) 以上、タイグ・オブライエンについては、下記の研究を参照した。Duffy, *Ireland in the Middle Ages*, p. 123; Nicholls, *Gaelic and Gaelicized Ireland in the Middle Ages*, pp. 182-183; Frame, *Colonial Ireland 1169-1369*, p. 45.
- 10) *AU*, 1258.3.
- 11) *The Annals of Loch Cé*, W. M. Hennessy (ed.), 2 vols. (London: Rolls Series, 1871), 1258.7. 以下, *ALC* と略す。
- 12) *Annála Connacht: the Annals of Connacht*, A. M. Freeman (ed.), (Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 1983); 1258.9. 以下, *AC* と略す。
- 13) *Annála ríoghachta Éireann: Annals of the kingdom of Ireland by the Four Masters*, J. O'Donovan (ed.), 7 vols. (Dublin, 1851; rep. Dublin: De Burca rare books, 1990), 1258.12. 以下, *AFM* と略す。
- 14) Katharine Simms, 'The Medieval Lords of Tír nEógain (Tyrone)', in Sean Duffy (ed.), *Medieval Ireland: An Encyclopedia* (New York and London: Routledge, 2005), p. 479.
- 15) 以上, *AU*, 1260.1; *ALC*, 1260.1; *AC*, 1260.2; *AFM*, 1260.4.
- 16) 順に, Duffy, *Ireland in the Middle Ages*, p. 123; James Lydon, *The Lordship of Ireland in the Middle Ages* (Dublin: Four Courts Press, new ed., 2003), p. 94; Nicholls, *Gaelic and Gaelicized Ireland in the Middle Ages*, p. 152.

(2021.9.30受付)